

## 第3回 国際日本学コンソーシアム

全体テーマ	「～食・もてなし・家族～」 国際日本学コンソーシアムは、世界の日本学研究の拠点である8大学から教員および大学院生を迎えて、国際的・学際的なジョイントゼミを行い、日本学研究および教育の世界的ネットワークを構築するものです。このコンソーシアムの開催により21世紀における日本学研究・教育の国際的連携が一層進展し、緊密な協力関係が樹立されるものと確信しています。
日時	2008年12月15日(月)・16日(火)・17日(水)
会場	お茶の水女子大学 (〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1) 15日【開会式】 人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室 (607号室) 【日本語学部会】 人間文化創成科学研究科棟 5階SCS室、同6階大会議室 (607号室) 【歴史学部会】 人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室 (607号室) 16日【日本文学学部会】 文教育学部 1号館 1階大会議室 【歓迎レセプション】 マルシェ大ホール 17日【日本語教育学部会】 人間文化創成科学研究科棟 5階SCS室、同6階大会議室 (607号室) 【日本思想部会】 文教育学部 1号館 8階803号室 【全体パネルディスカッション・全体会議】 人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室 (607号室)
参加校	ロンドン大学東洋アフリカ研究院SOAS (英国)、国立台湾大学 (台湾)、カレル大学 (チェコ)、淑明女子大学校 (韓国)、同徳女子大学校 (韓国)、北京外国語大学北京日本学研究センター (中国)、パリ第7大学 (仏国)、お茶の水女子大学 (日本)、ヴァッサー大学 (米国、特別参加)
主催	お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」、女性リーダー育成プログラム (人社系)、比較日本学教育研究センター

12月17日(月) 第1日目	
10:00～11:00	<b>開会式</b> 【会場】 人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室 (607号室) 【司会】 森山新 (本学)
12:30～16:30	<b>〈日本語学部会〉</b> 【担当】 高崎みどり (本学) 【司会】 百瀬みのり (本学大学院生) 【会場】 人間文化創成科学研究科棟 5階SCS室、6階大会議室 (607号室) <b>第1部</b> 【会場】 人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室 (607号室) 「タマネギ1個とセロリ1本 “One onion and one celery” ?——食べ物名詞の捉え方の日英比較と英語・日本語教育への示唆」 岩崎典子 (ロンドン大学SOAS) 「広告と食一日・韓のコマーシャルからみることばと食一」 具軟和 (本学大学院生) *****休憩***** <b>第2部</b> 【会場】 人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室 (607号室) 「日本語学習者からみたジェンダー言語」 阪口治子 (ロンドン大学SOAS大学院生) 「日本語の歴史の中の位相と性差」 藤井禎子 (本学大学院生) 「江戸語の位相と遊里語」 チョールナヤ・アンナ (本学大学院生) 「タイ語の文末辞と日本語の終助詞「わ」——「Kha」と「わ」の対照」 イソ・アパコーン (本学大学院生) 「平安時代の和歌の贈答について」 高橋秀子 (本学大学院生) *****休憩*****

	<p><b>交流の時間</b> 【会場】人間文化創成科学研究科棟 5 階SCS室</p> <p>① 参加大学院生の 3 分間スピーチ  「目的をもった会話の研究—多人数による話し合い場面を中心に—」  星野祐子 (本学大学院生)</p> <p>「中世期日本語資料にみられる接続詞の機能」  百瀬みのり (本学大学院生)</p> <p>「歌舞伎テキストにおける義太夫節の機能」  井之浦茉里 (本学大学院生)</p> <p>「日中語の指示詞の対照研究」  王湘榕 (本学大学院生)</p> <p>「三島由紀夫の戯曲の表現」  高橋由衣子 (本学大学院生)</p> <p>「言い切りの夕について」  石井佐智子 (本学大学院生)</p> <p>② SOASなど参加協定校における日本語学研究的現状報告、共同研究の可能性、等、自由な意見交換</p>
15:30~19:00	<p><b>〈歴史学部会〉</b></p> <p>【担当】古瀬奈津子 (本学)</p> <p>【司会】矢越葉子 (本学大学院生)</p> <p>【会場】人間文化創成科学研究科棟 6 階大会議室 (607号室)</p> <p><b>第 1 部</b></p> <p>「国民性を反映する食の文化及びその変遷」 シーコラ・ヤン (カレル大学)</p> <p>「家族法における人間像と家族法改正問題」 小沼イザベル (パリ第7大学)</p> <p>「Golf Clubbing—もてなしとしてのゴルフ」 アンガス・ロキア (ロンドン大学SOAS)</p> <p>*****休憩*****</p> <p><b>第 2 部</b></p> <p>「19世紀におけるジャポニスムと日本製洋食器 “Japonisme in the 19<sup>th</sup> Century and Western Tableware Made in Japan”」  今給黎佳菜 (本学大学院生)</p> <p>発表言語：英語</p> <p>「芋粥の話」 古瀬奈津子 (本学)</p> <p>「平安貴族の招待状—書状にみる交遊空間—」 野田有紀子 (本学リサーチフェロー)</p> <p><b>討 論</b></p>

12月16日 (火) 第 2 日目	
11:00~12:30	<p><b>呈茶会</b></p> <p>【会場】本学お茶室</p> <p>【担当】野崎桂子 (本学アカデミック・アシスタント)</p>
13:00~16:50	<p><b>〈日本文学部会〉</b></p> <p>【テーマ】「日本文学における食・もてなし・家族」</p> <p>【担当】菅聡子 (本学)</p> <p>【司会】武内佳代 (本学大学院生)</p> <p>【会場】文教育学部 1 号館 1 階大会議室</p> <p><b>第 1 部</b></p> <p>「漱石の作品における食・もてなし—『虞美人草』を例として—」 范淑文 (国立台湾大学)</p> <p>「北条氏繁の寝茶の湯—戦国武将の生活の一齣」 森暁子 (本学大学院生)</p> <p>「芥川龍之介における母性認識—初期の母性描写の抑制から後期の母性謳歌へ—」  麥媛婷 (国立台湾大学大学院生)</p> <p>*****休憩*****</p>

第3回国際日本学コンソーシアム

	<p><b>第2部</b></p> <p>「文学家の経済意識と家庭——島崎藤村と1920年代の日本を背景として——」 李志炯（淑明女子大学校）</p> <p>「マグダレナ・ドロミラ・レティゴヴァー：チェコ料理及び文学への貢献」 クジヴァーンコヴァー・アンナ（カレル大学大学院生）</p> <p>「菊池寛の通俗小説における近代家庭の女性」 朴嫻榮（淑明女子大学校学生）</p> <p>「国家と家庭と女性——日・韓近代文学における看護婦表象と良妻賢母思想——」 李南錦（本学大学院生）</p>
18:00~20:00	歓迎レセプション（マルシェ大ホール）

12月17日（水） 第3日目	
09:00~12:30	<p>〈日本語教育学部会〉</p> <p>【テーマ】文化を取り入れた総合的日本語教育のための新たな取り組み —TV会議を用いた国際遠隔協働授業とセミナーを通じた交流型授業—</p> <p>【担当】森山新（本学）</p> <p>【司会】石井佐智子（本学大学院生）</p> <p>【会場】人間文化創成科学研究科棟5階SCS室</p> <p><b>第1部</b> 【会場】人間文化創成科学研究科棟5階SCS室</p> <p>「ヴァッサー大学日本語夏期研修：交流を通じた異文化理解」 ドラーヂ土屋浩美（ヴァッサー大学）</p> <p>「Web掲示板と遠隔TV会議システムを利用した授業実践——「言い訳」に注目して——」 佐野香織（ヴァッサー大学 本学大学院生）</p> <p>*****休憩*****</p> <p><b>第2部</b> 【会場】人間文化創成科学研究科棟5階SCS室</p> <p>「文化を取り入れた総合的日本語教育のための新たなとりくみ——国際交流型授業と国際遠隔協働授業——」 森山新（本学）</p> <p>「[交流法]による多文化理解の効果と限界について」 李徳奉（同徳女子大学校）</p> <p>「多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性——第5回日韓大学生国際交流セミナーを通して——」 西岡麻衣子（同徳女子大学校大学院生）</p> <p>「国際遠隔協働授業は文化を取り入れた総合的日本語教育として有効か——JFL韓国人日本語学習者の授業評価を中心にして——」 小林智香子（本学大学院生）</p>
09:30~12:10	<p>〈日本思想部会〉</p> <p>【担当】頼住光子（本学）</p> <p>【司会】斎藤真希（本学大学院生）</p> <p>【会場】文教育学部1号館8階803号室</p> <p><b>第1部</b> 〈「食・もてなし・家族」〉</p> <p>「仏教における「食」」 頼住光子（本学）</p> <p>「神道における「食」」 高島元洋（本学）</p> <p>「日本文化論の中の「家族」」 張彦麗（北京日本学研究センター）</p> <p>*****休憩*****</p>

	<p><b>第2部</b> 〈大学院生自由課題発表〉</p> <p>「神と妖怪——柳田國男『妖怪談義』の中で語られるお化け——」 大内山祥子（本学大学院生）</p> <p>「『日本靈異記』についての一考察」 尾崎円郁（本学大学院生）</p> <p>“On the medical paradigm: <i>Stoics and Buddhists. A comparative approach</i>” ロレンテュ・アンドレイ （ブレイズパスカルクレルモンフェラン第二大学大学院生、本学大学院留学生） 発表言語：英語 フランス語通訳：伊藤みずほ（本学大学院生）</p> <p>「幕末期における武士階級の倫理思想——幕末の社会情勢との関連を中心に——」 李斌瑛（北京日本学研究中心大学院生）</p>
13：30～16：30	<p><b>全体パネルディスカッション・全体会議</b></p> <p>【司会】古瀬奈津子（本学）、森山新（本学）</p> <p>【会場】人間文化創成科学研究科棟6階大会議室（607号室）</p> <p><b>第1部</b></p> <p>〈各部会報告〉</p> <p>日本語学部会（報告者：百瀬みのり）</p> <p>歴史学部会（報告者：重田香澄）</p> <p>日本文学部会（報告者：武内佳代）</p> <p>日本語教育学部会（報告者：石井佐智子）</p> <p>日本思想部会（報告者：斎藤真希）</p> <p><b>第2部</b></p> <p>各大学との意見交換 — 来年度のコンソーシアムに向けて</p>

## 〈全体総括〉

### 【国際日本学コンソーシアムが追求した3つの課題とその成果】

今回が第3回となる国際日本学コンソーシアムは、3月、海外参加大学の1つ、ロンドン大学SOASを訪問し、コンソーシアムのあり方について模索するところから始まった。

その結果、今回は以下の点を達成目標として決定した。

- ① 学際性：日本学を日本語学、日本語教育学、日本文学、日本思想、日本史学の5つの部会を設け、専門性を追求するとともに、部会を超えた統一テーマを設定し、学際性をも追求する。
- ② 国際性：国際性と情報伝達スキルの向上をめざし、英語による講演、発表を積極的に奨励する。
- ③ 院生主導：院生のリーダーシップ育成のため、準備、運営において院生の参加を促す。

コンソーシアム実行委員会は、古瀬（歴史学）、高崎（日本語学）、菅（日本文学）、頼住（日本思想）、森山（日本語教育学）の5名の教員、矢越（歴史学）、百瀬（日本語学）、武内（日本文学）、斉藤（日本思想）、石井（日本語教育学）の5名の院生によって構成、数回の打ち合わせを経て、12月15日（月）～17日（水）の開催、「食・もてなし・家族」といった統一テーマを決定、海外参加大学に対し、教員、院生の参加を依頼した。その結果、ロンドン大学SOAS（英国）、カレル大学（チェコ）、台湾大学（台湾）、北京日本学研究中心（中国）、淑明女子大学（韓国）、同徳女子大学（韓国）に加え、新たにパリ第7大学（フランス）が加わった（パデュエ大学は残念ながら日程の都合がつかず、今回は不参加となった）。また今回からTV会議システムを導入し、日頃TV会議を通じて日本語教育の共同授業を実施しているヴァッサー大学（米国）がTV会議を通じての特別参加となった。

以下、上記①～③について、全体を総括する。

- ① 学際性：日本学を5つの部会に分けて専門性を追求するとともに、統一テーマを設定することで学際性を追求するという点については、最終日の全体会議では概ね高い評価であった。統一テーマを設定しなかった第1回、第2回のコンソーシアムでは、他の部会への関心は決して高いとは言えず、自身の属する部会以外への参加は決して多いとは言えなかったが、今回は統一テーマを設定することで、自身の部会以外への参加が増えた。また各部会でも統一テーマを中心に学際性を追求しようといった姿勢が感じられた。学際性の追求は通常困難とされ、敬遠されることが少なくないが、統一テーマを設定することで領域間の関係構築が促進されることが確認できた。
- ② 国際性：今回いくつかの講演及び発表が英語で行われ、情報伝達スキルの向上に向け、重要な第一歩となった。またTV会議の導入により、海外とのネットワーク構築、共同教育・共同研究の日常化の道が開かれた。
- ③ 院生主導：各部会では院生が司会を担当したほか、最終日の全体会議において各部会の報告を行うなど、運営面で院生が積極的に参加する形態が構築できた。

このようにコンソーシアムが求めるべき、学際性、国際性、院生主導という3つの課題が今回達成された点で、これまでになく実り多きコンソーシアムであったといえることができる。

このほか最終日の全体会議で挙げた意見としては、以下のようなものがある。

- ① Web、TV会議などを通じてネットワークを日常化する。
- ② 発表内容は事前に配信し、コンソーシアムでは質疑応答に重点を置き、討論を深化させる。
- ③ 海外での開催も積極的に模索する。

これらをふまえつつ、次回はより実り多きコンソーシアムの開催としていきたいと思っている。

【文責：本学比較日本学教育研究センター長 森山新】

## 〈日本語学部会〉

全体テーマ「食・もてなし・家族」という新鮮な観点から日本語の表現をみるという、得難い経験ができたことを喜びたい、と思います。

最初の第一部の講演「タマネギ1個とセロリ1本―食べ物名詞の捉え方の日英比較と英語・日本語教育への示唆」(岩崎典子先生 英国 ロンドン大学SOAS)が始まって、いろいろな形状のおいしそうな食べ物の映像がスクリーンに映ったとき、なんてびっくりのお話か、とわくわくしました。それからはもう、どの発表も、“食”とか“もてなし”とか“ジェンダー”とか、新たな切り口で日本語を料理する、フレッシュな包丁さばきを楽しみました。ふだんの大学院の日本語学ゼミで、聞き慣れているはずの院生たちの発表内容も、器を変えて盛りつけを凝らせば―もともとしっかりした研究なので―挙に“前景化”するのですでした。

その勢いで、「交流の時間」も、いろいろなバックグラウンドを持つ参加者が、各自の研究テーマを披露し合い、刺激しあいました。今回のテーマにあまり関係がなくても、どこかで何かの接点を探り合いながら、研究姿勢への尊敬の気持ち、研究方法への示唆や、日本語研究のおもしろさへの共感が共同研究への芽に将来育っていく可能性、など、各自が得たものは、今後いろいろなところで、豊かな実りとなることでしょう。

ご発表、ご参加の先生方、院生・学部生の皆様、司会・準備・裏方、など多くのことをこなして下さった皆様に深く感謝申し上げます。

【文責：本学教授 高崎みどり】

第三回の国際日本学コンソーシアムは、「食・もてなし・家族」をテーマとし、日本語学部会でも各自が多彩な研究発表を行った。以下、それについて簡単に触れつつ、総括してみたい。

【第1日目】2008年12月15日(月) 12:30~16:30 日本語学部会  
会場：【第一部】【第二部】人間文化創成科学研究課棟 6階大会議室  
担当：高崎みどり(お茶の水女子大学)  
司会：百瀬みのり(お茶の水女子大学・大学院生)

### 【第一部】

講演「タマネギ1個とセロリ1本 “One onion and one celery” ? ―食べ物名詞の捉え方の日英比較と英語・日本語教育への示唆」

英国・ロンドン大学SOASの岩崎典子先生によるお話から、今回のコンソーシアムは始まった。加算・付加算の文法的区別の存在(英語)と不在(日本語)が、英語母語話者、日本語母語話者の食べ物名詞の捉え方に影響するかどうかを調査した結果、食べ物名詞の捉え方には両者に有意差がなかったという報告がまずあり、それなのになぜ、英語の加算・不加算や日本語の助数詞の習得が難しいのかという問題が提出された。岩崎氏はこれを、「食べ物名」を短絡的に文法項目と直結させて教えている従来の教授活動や、授業が実際に行われている教室内で、文脈や場面の配慮より、文・単語レベルの学習が優先されている結果ではと報告した。そして今後の教育活動への示唆として、文脈・場面を考慮した上での加算・不加算や助数詞の選択練習や、それらの選択判断について、プロトタイプ的なものと、そこから連続性をもつものに分けて教えていくことなどが提案された。

### 研究発表「広告と食―日・韓の商業からみることばと食―」

本学大学院生の具敷和氏の研究発表がそれに続いた。おいしさや味覚をどう捉えて表現するかを商業媒体から眺めたのが本研究である。共通点としては、日本も韓国も「おいしい」、「うまい」、「健康」、「自然」という表現が多用されている場合が多いことである。世は未曾有の長寿社会であり90年代後半からの健康ブームも手伝って、世界的に健康についての関心は高い。また特に日本では、人が手を加えた人工的なものよりも、天然のままの自然なものの方が好まれるという、古来よりの伝統的な価値観がある。おいしさや味覚についても、同様のことが言えるようである。相違点としては、日本は飲料の商業が多く、酒類も加えると、飲み物の広告が全広告の4割を占めるのに対し、韓国では飲み物の広告はそれほど多くはなく、特に酒類の商業は好まれない傾向があること、代わって韓国では加工食品の広告が多くを占め、農産物の広告も日本より見られ

ること、日本が食品の風味を表す表現が多いのに対し、韓国では食品の品質をアピールする傾向が強いこと、コマーシャルに使われている異なり語数、延べ語数ともに韓国よりも少ないことなどが挙げられる。日本人の、食品の風味やイメージの重視は、食品のパッケージのデザインへのこだわりやコマーシャルに起用されるタレントの集中などからも推し量られよう。

## 【第二部】

第二部は学生による研究発表が五つ行われた。

### 研究発表「日本語学習者からみたジェンダー言語」

英国・ロンドン大学SOAS大学院生の阪口治子氏の発表は、日本語学習者のジェンダー認識を明らかにするものである。氏は、日本に留学経験のある日本語学習者を対象に、どのように日本社会でのジェンダー、日本語における性差と日本社会の関係の捉え方、認識しているジェンダー言語の種類、実際のジェンダー言語の使用と自己のジェンダー意識の関係について調査を行った。結果、回答者の大半がジェンダー言語に対しステレオタイプ化したイメージを持ち、実際の言語行動の多様性に関しては深い認識を持っておらず、むしろ中立的な、オーソドックスな日本語を使用していることが分かった。また学習者の性差だけでなく、年齢が回答に影響を与えてことも見て取れた。氏はこれを受け、日本語教育の現場での言語行動の多様性の意識と、記述的情報に基づくジェンダー言語の指導の推進を、また日本語母語話者には、自己が学習者にとって常に文化的・言語的情報源となることを意識した学習者との関わりの促進を提言した。

### 研究発表「日本語の歴史の中の位相と性差」

は、本学大学院生、藤井禎子氏によるもので、前述の阪口氏の発表とも関連付けられるものである。語の位相差は、性差、地域差、階層差などによるものがある。中でも藤井氏は性差によるもの、特に女性によって使用された女房詞に着目し、それがどのように一般社会に広まったかを検証した。

### 研究発表「江戸語の位相と遊里語」

は、本学大学院生、アンナ・チョールナヤ氏によるものである。前述の藤井氏の扱った女房詞と並ぶ女性特有の言葉に、主に近世に遊里で遊女やその周辺に使用された遊里語がある。また、同様に男性が専ら使用した言葉として武士詞がある。チョールナヤ氏はそれらを、敬語や人称などの観点からまとめた。

### 研究発表「タイ語の文末辞と日本語の終助詞「わ」：「Kha」と「わ」の対照

は、本学大学院生、イソ・アパコーン氏によるものである。日本語の終助詞「わ」は、女性が主たる使い手である場合が多い終助詞であるとはよく整理されるものであるが、氏はそれとよく似たタイ語の文末辞である「Kha」に注目した。両者は共通点として文末に置かれ、主に女性が使い手であることが挙げられる。相違点としては「Kha」が相手への丁寧さや敬意などを表し、親密でない、または目上の相手に対して用いられるのに対し、「わ」は、かつては親和感を表していたのが、今は強気を表す、強い主張を表すときに使用されるようになったと観察できることであるという。共にそれらの特性から、家庭内のような、親密な関係の人間で構成され、かつ状況にもよるが、基本的には強い主張がなされることがない場面で使用される言葉である、という氏の研究の結果新たに発見された共通点が発表された。

### 研究発表「平安時代の和歌の贈答について」

は、本学大学院生、高橋秀子氏によるものである。平安時代には和歌や和歌を書いた文を、花や葉、枝のような植物に添えたり、またそれらに直接和歌を書き付けて贈ることが行われた。先行研究において、和歌や消息などの文に添える植物のことを「文付枝（ふみつきえだ）」と称されていることを受け、氏は、それに加えて、書きつけられた植物そのものをも「文付枝」と位置付け自論を展開する。特に『うつほ物語』と『源氏物語』における文付枝の例を比較検討した結果、例の数はほぼ同数であるが、用いられ方に相違があり、『源氏物語』では用いられ方が「添える」ことにほぼ終始しているのに対し、『うつほ物語』では用いられ方が様々で、その植物の種類も多いということが分かった。具体的には、木の実をくりぬいて中に和歌を入れて贈る、植物そのものに和歌を

書きつける、手習いの手本に植物を添えて贈るなどの例である。結果として『源氏物語』よりも『うつほ物語』の文付枝の用いられの方が、独立した表現手段としては弱いところがあるが多彩であると氏は見る。さらに、『うつほ物語』では特に植物に書きつけられた歌は全て恋の歌であり、相手を慕う心を伝えるには書きつく方法が最適であるとされていることが考えられ、また実の中に和歌を入れる方法は文付枝の用いられ方として特異であり、これが晋の故事を踏まえているとすると、作者は物語への故事の採用に留まらず、それを和歌の贈答手段に転じさせたことになるかとまとめあげる。

## 【交流の時間】

### ① 参加大学院生のスピーチ

次に本学の大学院生による、自身の研究テーマの発表が行われた。

「目的をもった会話の研究—多人数による話し合い場面を中心に」は、星野祐子氏による発表である。本研究は、話し合い場面を中心に、目的をもった会話を人はどう行っているかについて考察しているものである。

「中世期日本語資料にみられる接続詞の機能」は、報告者百瀬みのりによる発表である。

中世期は、日本語が音韻、語彙意味、文法のあらゆる面で古代語から近代語へと移行した時代である。中でも接続詞の成立は、日本語の近代語化に寄与するところ大であった出来事といえる。本研究では、①接続詞の成立②接続詞の機能③接続詞の運用に特に注目し、接続詞の成立要因の解明、諸言語単位を「つなぐ」だけではない接続詞の機能、文章や談話中での接続詞の運用のされ方を考えるものである。特に最近の観察では、接続詞には「区切る」機能が見られることが分かり、それについてさらに考察中である。

「歌舞伎テキストにおける義太夫節の機能」は、井之浦茉莉氏による研究である。氏は歌舞伎テキストにおける義太夫節がもつ、地の文を語ること以外の機能を見、特に引用、くり返し、オノマトベ（音象徴詞）などの多様な表現に注目して考察を行っている。

「日中語の指示詞の対照研究」は、王湘榕氏による研究である。氏は、指示詞によるテキストの一貫性や結束性を保証する機能に注目する。日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の三体系であるが、中国語のそれは「這・那」の二体系である。氏の研究によれば、日本語の「ソ」系と中国語の「那」系はそれほど一致はしておらず、中国語の場合、聞き手との関わりではなく、話し手のかかわりの有無によって、対象が「われわれ」の領域内に属するものと捉えられれば「這」で、「われわれ」の領域外に属するものと捉えられれば「那」で指示するとする。さらに、日本語の「ソ」系が中国語の「這」で訳されている例文に着目し、日中の文章の結束性の相違点を観察する。

「三島由紀夫の戯曲の表現」は、高橋由衣子氏による研究である。氏は、三島由紀夫の戯曲と短編小説の表現に着目し比較することで、その戯曲の表現について明らかにする。

氏の研究によれば三島の場合、戯曲と小説では比喩表現、人物の会話的特徴、外的特徴、空間・時間表現などが異なるという。三島は戯曲では、意外にも技巧を凝らした比喩を用いることはないこと、台詞に地域方言を用いる場合、品のない人物がその使い手である場合が多いこと、「海」が重要な場面で登場すること、時間は順序を変えることなく、一方方向に進んでいくのみであることなどが氏の研究により明らかとなった。

「言い切りの夕について」は、石井佐智子氏による研究である。

第二言語習得において難しいとされる時間表現のうち、氏は日本語の夕に注目する。学習者は初級で学習した「夕＝過去」の用法が全てであると思いつく傾向があるようだが、日本語の夕には過去テンスを表す以外の多くの用法がある。氏はそれらに注目し、過去を表す以外の夕の用法について、日本語母語話者、非母語話者を対象にアンケートを行い、両者の相違の有無や、相違がある場合、どこにそれが見られるかを調査した。また、母語話者がこの多様な夕をどう捉えているかを明確にするために、クラスター分析、正誤判断を行い、定量的な調査から夕の使い方を検討することも準備中であるという。

### ② SOASなど参加協定校における日本語学研究的現状報告、共同研究の可能性、等、自由な意見交換

①で行った発表を受け、茶話会形式で交流がもたれた。

英国・ロンドン大学SOASの岩崎先生、阪口氏からは、ジェンダー言語の捉え方が最近日本でも変わってきたのではという提言がなされ、日本語母語話者として生活基盤を日本に置くその場のほとんどのメンバーが、自身のジェンダー言語観について語りあった。



また、会には日本語教育専門の森山新先生や日本文学専門の台湾大学 范淑文先生、麥媛婷氏など、関係諸分野からの出席もあり、それぞれ自身の専門について、また母校の語学教育のあり方についてなど、話が弾んだ。

第二回のコンソーシアムに比し、大きな収穫の一つは、この【交流の時間】の設定であったと考えられる。話がしやすいように座を正方形に配置し、お茶やお菓子などを供して正に「もてなし」の形式にして話を行ったことで、普段は接することができない他校からの参加者らとも触れ合い、議論ができたことは、自身の研究の深化や振り返りに、大きな役割を果たした。惜しむらくは、他の部会と開催時間が重複し、参加を希望していながら不参加とせざるを得ない人々も若干いたことである。時間の設定や教室の配置などについて再考し、次年度の第四回国際日本学コンソーシアムにぜひ生かしていきたい。

**【第3日目】2008年12月17日（水）13：30～16：30**

全体パネルディスカッション 全体会議

会場：人間文化創成科学研究科棟 6階大会議室

司会：古瀬奈津子、森山新（以上、お茶の水女子大学）

**第一部 各部会報告**

日本語学部会からは報告者百瀬みのり（日本・お茶の水女子大学・大学院生）が報告を行った。

（報告内容は上記と重複するため割愛する。）

**第二部 各大学との意見交換—来年度のコンソーシアムに向けて—**

統一テーマや交流の時間の設定などは、参加した協定校からも好評であった。一方、発表時間の余裕の確保、全部会の発表が聞けるような教室や発表時間の設定については今後の課題として残った。

またギャラリーの確保という意味で、コンソーシアムの前もっての宣伝や、時間の有効活用のための、電子メール等を利用しての、発表内容のコンソーシアム前の通知と内容把握や、最終日の公開シンポジウムと部会合同での議論の開催についての提案などがなされた。

次年度の第四回国際日本学コンソーシアムを開催する上で、これらは良い課題となるであろう。次回には、今回の問題点を解決し、より充実したコンソーシアムの実行を目指していきたい。

**【文責：本学大学院生 百瀬みのり】**

## 〈歴史学部会〉

今年度の国際日本学コンソーシアムは初の試みとして、統一テーマ「食・もてなし・家族」を設定して開催する運びとなった。歴史学部会では、まず、第一部において、チェコのカレル大学のヤン・シーコラ氏が「国民性を反映する食の文化及びその変遷」、フランスのパリ第7大学のイザベル・コヌマ氏が「家族法における人間像と家族法改正問題」、イギリスのロンドン大学SOASのアンガス・ロキア氏が「Golf Clubbing—もてなしとしてのゴルフ」の講演を行った。

ヤン・シーコラ氏の講演は、グローバル化の進行とアイデンティティーの喪失について、「ザビヤチカ」という現代まで継承されている肉祭りを、チェコの国民性を反映する食文化として取り上げて論じ、食文化による新しい文化圏を提示した。イザベル・コヌマ氏は、日本の明治民法と現行の家族法における人間像を比較し、戦後の家族法では私的領域は個人の自由に委ねたが、家族を公序としたために公私二元的な家族構造が生まれ、現在では婚外子の人権や夫婦の人権の尊重という問題が新たに生じ、現実の人間像が法的人間像に影響を与えていると論じた。アンガス・ロキア氏は、20世紀日本におけるもてなしとしてゴルフを取り上げて、戦前のエリートに独占されていた集会場から、戦後は中産階級によって楽しまれるようになり、さらにバブル後、ゴルフ産業は新たな形を追求し始めていることを、豊富な映像を用いて紹介した。以上のように、第一部においては、それぞれの講演者が、食、家族、もてなしという視点から、近現代という時代を歴史学的に考察したと言える。

第二部においては、本学大学院生の今給黎佳菜さんが「19世紀におけるジャポニズムと日本製洋食器」の研究発表を英語で行った。つぎに、私が「芋粥の話—有職故実から生活社会史へ」、本学リサーチフェローの野田有紀子氏が「平安貴族の招待状—書状にみる交遊空間—」の講演・研究発表を行った。

今給黎佳菜さんの研究発表は19世紀における欧米のジャポニズムに対する日本側の対応について、陶磁器産業の変化を通じてみたもので、西欧におけるテーブルウェアの成立とそれに対応した日本の洋食器産業という、従来の美術史的な観点からのジャポニズム研究とは異なった経済史的な観点の研究で、大変興味深い内容であり、今後の研究の進展が期待される。また、今給黎さんの研究発表が英語で行われたことも特筆される。今給黎さんは本学とロンドン大学SOASとの交流協定により昨年度留学した経験をもっている（アンガス・ロキア氏が留学時の指導教員であった）。このように、日本史の学生であっても、学生時代から留学し外国から日本を相対的にみていくことは、今後さらに求められていくだろう。また、外国の日本に関する著書・論文は英語で書かれることも多く、日本学を学ぶ人たちであっても、まずは英語で日本に関する情報を得ることも多い。今後、日本学の研究者であっても、日本語を話すことができる外国の日本学研究者だけを対象とするのではなく、広く世界に日本について発信していく場合には英語で話したり書いたりすることが重要になっていくだろう。

私の講演は、芥川龍之介の短編小説で著名な『今昔物語集』の「芋粥」について、どのようなものであり、平安・鎌倉時代にはどのような時に食されていたのか、どこがおいしいと思われていたのかを、従来有職故実と称されていた儀式書や貴族の日記から明らかにしたもので、有職故実の史料を用いて生活社会史を描き出すことの可能性について述べた。野田有紀子氏の発表は、従来歴史学ではあまり史料として用いられてこなかった書状の範例集である往来物を使って、平安時代中後期の私的交遊の集いのために出される招待状について分析し、食料・酒肴などを持参することなどの連絡があったこと、また、このような場には作文・和歌・蹴鞠・管弦・小弓などの「能」が重要な役割を果たしており、そのような「能」を有していることによって新しい社会的な関係を結ぶことが可能な場合もあり、「能」は貴族社会で生き抜くための武器となったことを論じた。

以上のように、第二部においては、食という視点から、日本の古代・近代の歴史を考察した講演・研究発表が行われたと言える。

今回の国際日本学コンソーシアムでは、初めて専門ごとの部会方式を採用した。歴史学部会においては、日本だけではなく、外国を対象とした講演もあったが、同じ歴史学の方法で日本と外国を比較することによって、日本の特徴が明らかになることもあり、有意義な部会となったと思う。「食・もてなし・家族」という統一テーマのために、各講演者・研究発表者には苦労を強いた面もあったが、今回の講演・研究発表を通じて、歴史学における「食」という視点の有効性を示すことができたと思う。また、英語の研究発表があったこと、各講演・研究発表にパワーポイントを使用する例が多く、プレゼンテーションの面からも成果のあった部会となった。

【文責：本学教授 古瀬 奈津子】

12月15日（月）15：30～19：00に開催された歴史学部会においては、4本の講演と2本の研究発表による計6本の報告が行われ、計30名の参加者があった。

第1部においては、今回のコンソーシアムのテーマである「食・もてなし・家族」に基づき、歴史的に形成および変遷しつつ、かつ現代社会に直接的に影響を及ぼしている事例に関して、チェコ・カレル大学のヤン・シーコラ氏による「国民性を反映する食の文化及びその変遷」、フランス・パリ第7大学の小沼イザベル氏による「家族法における人間像と家族法改正問題」、イギリス・ロンドン大学SOASのアンガス・ロキア氏による「Golf Clubbing — もてなしとしてのゴルフ」の3本の講演が実施された。チェコの風土から見た食文化の変遷および歴史観との関連、明治身分法と戦後の家族法の比較を通じた人権や法的人間像の変遷、戦前から現代までを対象とした日本におけるゴルフ文化の変遷、と扱うテーマは三者三様であったが、「伝統」や「文化」といった今日においては普遍的と捉えられるものがいかにして形成され、また時代の変化とともに今日いかにして変容しつつあるのかを論じたという点で大きく共通していた。

第2部では、「食・もてなし・家族」のテーマに基づき、各時代における具体的事例に関する3本の報告が行われた。本学博士前期課程の今給黎 佳菜氏による「19世紀におけるジャポニズムと日本製洋食器“Japonisme in the 19th Century and Western Tableware Made in Japan”」は、これまでの日本学においては海外からの視点で語られることの多かったジャポニズムを、洋食器生産に限定するものの、国内からの視点で取り扱った報告であった。また報告言語として英語を採用しており、国際的な発信という観点からも評価できる。本学の古瀬 奈津子氏による「芋粥の話—有職故実から生活社会史へ—」は、『今昔物語集』を題材に平安時代の公的な宴会でふるまわれていた芋粥を紹介し、儀式書や古記録（貴族の日記）などによりその具体像を探ったものである。近年、政治機構や政務運営などの分野で深化しつつある儀式研究を、生活社会史の分野に応用しようという意欲的報告であった。本学リサーチフェローの野田 有紀子による「平安貴族の招待状—書状にみる交遊空間—」は、11世紀に成立した文例集である『明衡往来』を素材に、平安貴族社会における私的交遊の実態や交遊における食を紹介し、またそのような場に下級官人が身分を超えて参加する上で重要な役割を果たした和歌・蹴鞠・管弦・武芸などの「能」についても言及された。

討論においては、第1部でのロキア氏による「日本学」および「日本文化」に関する提言を受ける形で、今日「日本文化」と言われているものがいかにして形成されたのかという点に関して議論が行われた。近世における今日的な意味での「日本文化」の形成、近代における「伝統文化」の創造といった問題ともあいまって、「日本学」という枠組みと直結する課題と言えよう。また、「日本文化」を探る上での、他文化との比較の重要性についても言及がなされた。比較の重要性は従来からも指摘されていることであり、今後はテーマをより絞り込んだり、あるいは比較すべき視点自体をテーマに据えたりする必要があるのではなかろうか。以上のような課題を見いだせたという点で、「食・もてなし・家族」というテーマは歴史学の分野においては有効であったように思う。

なお、上記のような意義深い報告・討論がなされたものの、参加者数が伸び悩んだ点は悔やまれる。学生の中には、コンソーシアムが通常の授業期間中に開催されることもあり、授業を優先した結果、自身の専門と関連する部会を欠席せざるを得なかったという意見もあるようである。コンソーシアム自体は比較社会文化学専攻の教員および学生が主体となって関与するものであるとしても、博士後期課程のみならず博士前期課程であっても関連する専攻分野についてはコンソーシアムを授業の一環として組み込む、もしくはコンソーシアムへの出席を授業への出席と同等に見なす、などの配慮を設けても良いのではないだろうか。それが、より活発な議論につながり、また本学で学ぶ学生の将来へとつながるのではないかとと思われる。

【文責：本学大学院生 矢越葉子】

## 〈日本文学部会〉

今回で三回を数える国際日本学コンソーシアムだが、今年度は新しい試みが二つあった。一つは、企画段階から学生たちがかかわり、本コンソーシアムの運営において中心的な役割を果たしたこと、そしてもう一つは、「食・もてなし・家族」という共通テーマを設定したことである。

準備段階から開催期間中のすべてのプロセスにおいて、かかわった学生たちならびに事務局のスタッフのみなさんは八面六臂の活躍で、まず、心より感謝したい。また、大学間交流の観点からしても、学生間の交流こそがその中心に置かれるべきで、その意味でも今回の運営体制は望ましいものであったと思う。

なお、日本文学部会においては、会場からの質疑が不発の場合、司会者が率先して発言を行ったが、海外からの参加者のなかには、このようなあり方をいぶかしく思われた向きもあったかもしれない。しかしこれは、日本文学の各種学会においては基本的な姿勢で、司会者は、質疑の有無（会場の沈黙）についてはその責を負わねばならない。よって、会場からの質疑が不発の場合には、司会者が議論の口火を切る役割を担う。そのためには、司会者は、事前に十分な準備を要求されるわけで、今回、司会担当の学生はこの要請（日本文学内ルールだが）によく応えてくれたと思う。

共通テーマを設定したことについては、学内外において賛否両論あるところで、今後の再検討が必要だろう。しかし、「食・もてなし・家族」というテーマは、少なくとも日本近現代文学研究においては、非常に有効である。本部会においての各発表の概要については、担当者による報告にゆだね、本稿では、上記のテーマについていくつかの視座を示すことで、今回のまとめにかえたい。

近現代日本文学において、〈食〉のシーンは、その作品に内在する種々の関係性の指標として機能する。典型的なものが、島崎藤村『家』(1910)冒頭の昼食の場面である。『家』においては、地方の伝統的大家族が、近代的家父長制度への変容へと回収されていく（そのために大家族という「家」の形は崩壊する）わけだが、冒頭の食事の場面は、従来の伝統的大家族制を象徴するものである。神棚を背に家長が上座にすわり（すなわち神の代弁者）、家族の構成員（それは末端の奉公人を含む）がその家族内の位階にしたがってすわる。各自の前にあるのは銘々膳である。家の主婦であるお種は、彼らと食事を共にせず、給仕＝もてなしに徹する。家長の「やってくれ」の一言を合図に大家族の構成員全員が〈同じ釜の飯〉を食する。この奉公人をも含む〈家族〉は、その労働を協同する共同体であり、その共同体の絆は〈同じ釜の飯〉を食することで確認される。一方、ほぼ同時期に書かれた夏目漱石『吾輩は猫である』(1905)で、苦沙味先生の一家が囲むのはちゃぶ台である。円形のちゃぶ台は、家族内に位階を形成せず（円卓会議と同じである）、家族は同等に位置づけられる。実際、小さな子ども達が好き勝手にふるまう苦沙味先生一家の食卓は混乱をきわめ、『家』における整然と秩序だった食事の場面とはまったく異質である。同時代において、家族秩序がこうむった変容は地方と東京とでは大きな違いがあった。地方の大家族と、東京の知識人の核家族の差違が、この食事の場面に如実に表れている。ちなみに、ある年代以上の日本人にとって、ちゃぶ台といえば星一徹、すなわちTVアニメ『巨人の星』(1970)で、頑固一徹の父親がちゃぶ台をひっくり返すシーンが自動的に連想されるが、これは父親の横暴を示すためだけのものではない。そもそもちゃぶ台をひっくり返すことができるのは、その上に並べられた食事を家族に提供し養っている家長の特権なのであって、強大な父権の象徴なのである。向田邦子脚本のTVドラマ『寺内貫太郎一家』(演出・久世光彦、1974)で、毎回、父親がちゃぶ台をひっくり返すシーンが〈お約束〉として演じられたのは、失われ行く父の権威への郷愁であり、この郷愁ゆえに、数々の向田作品は〈昭和〉を象徴するものとして、現在もなお、多くの人々から強い愛着を寄せられているのである。

家父長制に限らず、「食」のシーンは家族の問題を前景化する。もっともよく知られる例は、映画『家族ゲーム』(監督・森田芳光、1983)において、主人公の家庭教師の生徒の一家が、横一列にならんで食事をしているシーンである。ちゃぶ台では家族は相互の顔を見ながら食事をするが、この映画では彼らの視線は全く交わらず、全員が一方向を見ている。では、彼らの見ている方向、映画の画面には現れないが、彼らの座る食卓のこちら側に位置するものとは何か。それはテレビである。映画館においては、彼らは観客と向き合うことになるが、映画の内部においては、彼らはテレビを見ていると思われる。すなわち、高度経済成長の時期を経て、戦後日本の家族の中心に位置するものはテレビになったわけである。しかし今や、テレビは一家に一台ではなく一人に一台の時代を迎え、現代日本の食の場面は限りなく〈孤食〉へと変貌している。〈食卓を囲む〉という日本語のレトリックそれ自体が、空疎なものとなりつつある。

岡本かの子『鮎』(1939)は、「食」の持つ高度な象徴性を遺憾なく発揮した名短篇である。登場人物「湊」は、幼い子どもの頃、〈食べること〉ができなかった。彼が何とか口にすることができるものは卵焼きと海苔だけで、何か透明なものだけで生きていきたい、と切望していた。肉や魚を食べると体が穢れるような気がし、嘔吐した。彼は本能的に、〈食べること〉が他者の〈死〉を体内に取り込むことであることを知っていたのである。そのような子どもの状態は、必然的にその生育の責任を負う母の疎外をもたらす。家長である父は母を責め、彼を無視する。しかし、ある日彼は、縁側に墓茱や道具を持ち出して、母親が清潔な手で握ってくれた鮎(非日常的な食事)を食べ、魚を食べることができた。このとき彼がとらわれた病的な高揚は、まさに彼が他者の〈死〉を乗り越えた勝利の快感を示している。食物連鎖の頂点に位置する征服者としての快感である。彼が〈食べること〉ができるようになって、父親は急に彼に眼を向けはじめが、それに従い肝心の家は没落へと向かい、物語の現在時、「湊」は家族を持たない〈孤食〉の人となりはてている点に、この作品の批評性がある。家父長制、社会への適応と馴致が家の没落をもたらしているのである。

鮎といえば志賀直哉『小僧の神様』(1920)だが、ここでは鮎という食文化記号が貴族院議員の「A」と、秤屋の奉公人「小僧」のこえがたい社会階層の断絶の象徴として使われている。小僧があこがれをもって見つめたのは、現在ではなくなっている「屋台」の鮎であり、「A」の家族のように、家に鮎をとることができるのは、ごく一握りの人たちに限られていた。すなわち、ここでは鮎という料理それ自体というより、それが饗される場所・形態が文化記号としての意味を担っているのである。ちなみに、全国に店舗展開する「小僧寿し」チェーンの名前が、創業者が『小僧の神様』を読み、高級食品であった鮎を、庶民の手の届くものとしておなかいっぱい食べてほしいと思ったことに由来することは、日本ではよく知られたエピソードである。

現代社会においては、〈食べること〉が生存本能としてよりむしろ社会的行為としての意味を持つこと、とくにもっとも小さな社会単位である家族と深く関わる行為であることは、よしもとばな『キッチン』『満月一統キッチン』(1987)が示すところだが(ちなみに上野千鶴子は、『キッチン』に登場する人間関係を、血縁によらない「食縁家族」と称した)、それをより繊細かつ鋭敏に描いたのは、大島弓子の少女マンガ『ダイエット』(1989)である。この作品で前景化されているのは少女の疎外と〈食〉の関係である。主人公の少女は、家族のなかで孤立しており(といっても、意識的にネグレクトされているわけではない)、その孤独をまぎらわすため、過食と拒食を繰り返す。最終的に、彼女は友人に救われるが、そのとき彼女ははじめて、食べ物(おいしい)と思うのである。このようなテーマが目立つようになったその背景には、日本の現代社会において、とくに若い女性の摂食障害が社会問題として広く認知されつつあったことがある。この〈食べること〉をめぐるオブセッションは、女性作家の作品には繰り返しあらわれる。松本侑子『巨食症の明けぬ夜明け』(1988、これは過食症を描いている)、小川洋子『妊娠カレンダー』(1990)などはその一例だが、この〈食べること〉をめぐるオブセッションを、とくに母-娘関係の機能障害の象徴として描いたのは倉橋由美子の諸作である。肥満し膨張を続ける母は、グレートマザーとして娘を抑圧するものの象徴であり、対照的に拒食し嘔吐し、やせ細っていく娘は、その抑圧と支配から逃げ切れず、肥満する母への憎悪は殺意へといたる。一九六〇年代、いまだ男性作家によって領有されていた〈知〉の文学、観念性と象徴性に満ちた言語表現の領域に登場した新世代女性作家としての倉橋が、どれほどのテクニカルハラメントにさらされたかは、別の場所で論じたのでここでは繰り返さないが、〈食〉をめぐる表象においても、彼女が現代女性文学の先駆けであったことは確かである。

樋口一葉『にぎりえ』(1895)では、白米と黄金色のカステラが、ともに絶望の記号として機能している。『にぎりえ』における、もっとも印象的なエピソードは、お力の子も時代の思い出である。一家の命をつなぐ白米がざらざらと溝板のすきまから泥の中へとこぼれ落ちてゆく、この場面で七歳のお力の視線は溝泥の底なき底を、つまり下方を見ている。この絶望は、物語の現在時においては、もう一人の「細民」の子、太吉のカステラのエピソードに重ねられる。黄金色の「日の出屋のかすていら」、溝泥にまみれたそれは、記憶の起源として太吉のなかに生き続けるだろうし、彼の場合、自分がもらったカステラが原因で両親が離婚し、さらにそのあと父が無理心中をとげたとなれば、そのトラウマははかりしれない。お力の子も時代の絶望は、そのまま、もう一人の「細民」の子である太吉において反復される。〈にぎりえ〉の生は反復され、その絶望は引き継がれる。明治下層社会の構造が、ここでは白米とカステラという食記号に託されている。

以上、例示したのは「日本文学における食・もてなし・家族」のごく一部分にすぎない。〈食〉は文学において多様な表象としての意義を担っている。作品へのアプローチの方法の一つとして有効であることをここに確認し、

日本文学部会のまとめにかえたいと思う。

【文責：本学教授 菅聡子】

日本文学部会は、国際日本学コンソーシアムの第2日目、12月16日（火）の13時から17時にかけて、文教育学部1号館1階大会議室にて行われた。部会テーマは、「日本文学における食・もてなし・家族」である。部会参加者数は、部会担当教員の菅聡子先生と司会の武内佳代の2名および発表者7名を除くと、約60人にのぼり、非常に盛況な会となった。

当部会は、第一部と第二部に分けられており、それらの最初にあらず、海外の大学からお招きした教員による基調講演があり、続けて院生が研究発表をする形をとった。

第一部は、国立台湾大学（台湾）の范淑文先生による、「漱石の作品における食・もてなし—『虞美人草』を例として—」という演題のご講演で幕を開いた。范先生は、漱石の日記や友人宛書簡などから、漱石の実際の〈もてなし方〉あるいは〈もてなされ方〉を丹念に辿ったうえで、次に、初期作である『吾輩は猫である』『草枕』、後期作である『道草』における来客場面を取りあげて、漱石がいかにか、もてなしの場面を意識的に描いていたか、について解説をされた。そして、『虞美人草』においては、女主人公の藤尾が、お茶や菓子をもてなす／もてなされるという振る舞いを決してしないことに着目して、そうした身振りこそ、誰にも心を許さない藤尾の心の悲劇の表出であることをご結論なさっていた。講演後には、菅先生から、これまで一切検討されてこなかった漱石作品のもてなしの表現について、改めてその重要性が明らかになったことなどが指摘された。

続いて、本学大学院生の森暁子さんが、「北条氏繁の寝茶の湯—戦国武将の生活の一齣—」というタイトルで発表なされた。茶の湯は、戦国時代以降、武将たちの嗜みとして大いに持て囃されたことで知られる。森さんのご発表は、16世紀の相模の国の武将、北条氏繁が行ったとされる「寝茶の湯」という風変わりな茶の湯をめぐる考察だった。『北条記』という本の一系統で紹介されている「寝茶の湯」は、身体の養生と楽しみとを目的として、横になりながら茶を楽しむなど、本来の茶の湯のかたちを崩すことに特色がある。発表は、そうした型破りから、氏繁の滑稽な人物像を改めて浮かび上がらせるものであった。発表に対して、会場からは、「寝茶の湯」が本来の型を崩すことについて、これは、武将であるにもかかわらず茶の湯という風流をやみくもに称揚する当時の武将たちの不心得に対する批判の意味合いがあったのではないかと、といった趣旨の見解が示された。

次に、国立台湾大学の大学院生の麥媛婷さんが、「芥川龍之介における母性認識—初期の母性描写の抑制から後期の母性謳歌へ—」というタイトルで、発表をされた。麥さんは、芥川龍之介の生い立ちを背景としつつ、芥川文学の「母性」の描かれ方を、初期作から晩年の作にかけて分析することによって、芥川の母性認識が、「母性に対する感情の抑制から母性賛美」へと変化していくプロセスを解明した。これについて、会場からは、芥川の母性認識を系譜的に分析した成果への評価とともに、「母性」という術語の定義をもう少し絞ったほうがより良くなるのではないかと、という提案が出された。

この後、15分ほどの休憩をはさみ、第二部へと移った。

第二部は、淑明女子大学校（韓国）の李志炯先生による、「文学者の経済意識と家庭—島崎藤村と1920年代の日本を背景として—」という演題のご講演から始まった。李先生は、1920年代の日本社会における、円本ブームによる作家の印税収入の急増や金融恐慌といった時代的経済的コンテクストのなかで、島崎藤村が、そうした同時代的状況をどのように短編小説『分配』に描き込んだかを、丹念に読み解かれていった。『分配』は、藤村の家庭をモデルとした作品として知られるが、なかでも、藤村自身をモデルとした「父」が、莫大な印税収入を四人の子供に配分するために、異なった銀行を利用しながら奔走する本作の後半部に焦点が当てられた。そして、そのような銀行巡りの描出が、同時代的コンテクストに照らして、最善の財産分与の方法という意味合いだけでなく、そのような行動をとった聡明な作家として、読者から好意的に見られるための藤村の身振りという意味合いをも併せ持っていることを明らかになされた。講演後には、司会者のほうから、作中に銀行巡りの理由が書き込まれていないことが、作者と読者の時代認識の共有それ自体を示しているのではないかと、などの意見を述べさせていただき、李先生から応答をいただいた。

続いて、院生による研究発表として、カレル大学（チェコ）の大学院生、アンナ・クジヴァーンコヴァーさんが、「マグダレナ・ドロミラ・レティゴヴァー：チェコ料理及び文学への貢献」というタイトルで発表をなされた。アンナさんは、18世紀から19世紀にかけてのチェコの民族・文化復興の気運において、女性作家マグダレナ・

ドブロミラ・レッチェゴウァーがチェコ語で著した、チェコの伝統料理や家庭に関する本が、単に料理や作法を紹介するにとどまらず、いかに中流階級家庭にチェコ語を再導入する役割を果たしたか、について検討をされた。質疑応答では、一般に母から子へと受け継がれやすい言語の在り方において、マグダレナの本の読み手が主に家庭の主婦であったことが、チェコ語復興に大きく寄与した要因ではないか、という見解が出され、また、マグダレナ自身がそうした効果を期待したかどうかについての質問が出された。そうした質問に対し、アンナさんからは、質問者の述べたような意味において、マグダレナの、フェミニストとしての再評価がチェコで始まっていることが紹介された。

次に、淑明女子大学の大学院生、朴嫻榮さんが、「菊池寛の通俗小説における近代家庭の女性」というタイトルで発表された。朴さんは、1920年代に発表された菊池寛の通俗小説の代表作『真珠夫人』と『東京行進曲』における女性の表象について、前者では社会規範に闘争心を抱く女性が描かれるのに対し、後者では近代家族へと抵抗なく参入しようとする女性が描かれているという違いに焦点を当てていらした。そして、前者に比べ、後者のほうが、読者を喜ばせるような都市文化の華やかさがより重点的に描かれていることを指摘しつつ、そのように変容させられた女性像こそ、良妻賢母思想が強調されはじめた世相において、読者である大衆の期待を吸い取った形象そのものであることを結論なされた。発表後は、『真珠夫人』において女主人公に重ねられる世界的悪女ユディトとの差異についてなどの質疑応答がなされた。また、司会者のほうからは、軍国主義下の良妻賢母思想が兵士産出の国家プロジェクトの一貫であることを補足説明させていただき、そのような体制に加担する女性像という暗部が、『東京行進曲』という作品では、都市モダニズム文化の華やかさによって隠蔽、充填されていることを述べさせていただいた。

最後に、本学大学院生の李南錦さんが「国家と家庭と女性一日・韓近代文学における看護婦表象と良妻賢母思想」というタイトルで発表をされた。李さんは、日・韓近代を代表する作家である、夏目漱石と李光洙<sup>イックファン</sup>の作品を中心に取り上げ、文学に描かれた看護婦表象と当時の時代言説との関わりを、ジェンダー論的な観点から検討なされた。文学作品とその他の文献・画像資料を通して、当時、癒しや安らぎを提供する存在としての看護婦が、セクシュアルと貞淑という二重のイメージをはらんでいたことを考察したうえで、家父長制下の日本社会および日本の帝国主義下にあった韓国社会において、そのような看護婦表象がいかに良妻賢母思想に基づく主婦／妻の表象へと接続されていったかを解明なされた。発表後は、漱石と李光洙の看護婦の描き方の差異について質問がなされ、そうした差異が当時の日韓の権力的布置の反映であることなどが応答された。

以上が、日本文学部会の内容報告である。

最後に、司会者の観点から感想や意見をいくつか付言させていただく。

当部会は、他の部会と日時が重ならなかつたため、思いの外、来場者数が多かったが、大きめの会場だったので、余裕をもってご着席いただくことができ幸いだった。とはいえ、そのような会場の大きさは、来場者からの質問や意見を少なくさせたように思う。いずれも明晰で刺激的な講演・発表であったにも関わらず、学生による質問や意見がとくに少なかったのが残念だった。今回の国際コンソーシアムでは、とくに院生主導であることが重視されていたことを考えれば、今後は学生がさらに積極的な発言ができるような、学生自身の企画による会場設営や事前勉強会などの準備が必要になるのではないかと。

また、今回の日本文学部会では、明治・大正時代の近代文学に関する発表に偏ったことが、一つの問題点といえるかもしれない。しかし今回の場合、そのように近代という時代に焦点化した多角的な発表の折り重なりが、むしろ部会の全体的まとまりを保ち、時代と文学の連関に対する会場の理解がより深まる好結果に繋がったように思える。これは、今後の部会の在り方、および、テーマの切り取り方を考えるうえで、一つのケースモデルになるにちがいない。

以上、日本文学部会に関する報告を述べさせていただいたが、紙幅の関係上、質疑応答の内容などについて多く割愛させていただいたことをご容赦願いたい。

【文責：本学大学院生 武内佳代】

## 〈日本語教育学部会〉

日本語教育学部会は「文化を取り入れた総合的日本語教育のための新たなとりくみ」をテーマに、3名の教員による講演、3名の院生による研究発表が行われた。直接に「食・もてなし・家族」を扱うことはなかったが、日本語教育においてはこれらを文化として取り上げることが多いことから、本部会ではそれらを「文化」としてひとくくりにし、上記のようなテーマとした。

今回は本学との間で実際に文化を取り入れた総合的日本語教育実践を行ってきた米国・ヴァッサー大学に対し特別に出演を依頼し、デモンストレーションも兼ねて、TV会議システムを用い遠隔ジョイントゼミ形式で行われた。それは、本コンソーシアムがめざす日本学研究の国際的な教育のネットワークを日常化していくためには、TV会議システムを導入し、世界各地の教室をリアルタイムで結びつけることが重要であると専攻長などより助言をいただいていたためである。第1回、第2回ははまだ経験の不足から実際にTV会議システムが用いられるところまではいかなかったが、今回は、これまで積み重ねてきた実践の中で自信を深め、実際の使用に踏み切った。

第1部はヴァッサー大学側からドラージ土屋浩美先生の講演、佐野香織さんの研究発表があり、これらを通じ、本学とヴァッサーとの間で3年前から行われている日本研修プログラムと今年から始まった遠隔での日本語・日本文化理解教育プログラムが紹介された。今後、本学とヴァッサーとの交流は、来日研修と事前事後の遠隔教育が組み合わされ、より大きな効果を挙げることが期待されよう。

続いて第2部では、まず私（森山）のほうから、本部会がこのテーマを取り上げた背景と、本学における具体的な実践である、

- ① 同徳女子大との日韓セミナー（2004年より毎年実施）
- ② ヴァッサー大との日本語・日本文化研修と遠隔教育
- ③ 釜山外大との国際遠隔共同授業

について紹介した。

このあと、「総合的日本語教育」を提唱し、リードしてこられた李徳奉先生より、国際交流を教授法と位置づけた「交流法」の効果と限界について講演があった。

最後に2名の院生からの発表があった。同徳の西岡麻衣子さんは日韓大学生国際交流セミナーについて、本学の小林智香子さんは国際遠隔共同授業について、その教育的効果についての研究発表があった。どちらも修士論文としてまとめられている。

全体を通して明らかになったことは以下のような点である。

- ① グローバル時代の今日、日本語教育は文化に対する理解を促進するための文化リテラシー教育が重要であること
- ② そのためには単に知識として文化を教えるだけでは不十分で、様々な形で人と人、文化と文化とが接触する場を設け、コミュニケーション能力の向上と、そこに介在する文化への理解、文化リテラシーの育成をはかる必要があること
- ③ これまで実践されてきた国際交流セミナーや国際遠隔共同授業はこうした総合的日本語教育の場として有効であること

会場には本学及び海外からの参加した大学院生のほかに、台湾大学の范淑文先生、カレル大学のヤン・シーコラ先生、ロンドン大学SOASのアンガス・ロキア先生、岩崎典子先生、そして本学からは日本語教育の佐々木泰子先生、日文の高崎みどり先生、菅聡子先生、グローバル文化学環の熊谷圭知先生など、50名ほどが詰めかけた。参加の動機はいろいろあろうが、一つにはこのようなセミナーやTV会議システムの可能性に関心を示したからであろう。そのため質疑応答では将来の導入を見据えての質問が目立っていた。

本学が行ってきた、こうした国際交流セミナーやTV会議システムによる遠隔授業は、今後ますます増えていくことは間違いない。しかし国際交流セミナーは期間が1週間程度と短期であること、TV会議システムはヴァーチャルな空間での間接的な接触であること、などの理由で、その効果に限界が存在することも事実である。その限界を少しでも克服していくためには、李徳奉先生が講演の中で語っていたように、教授法構築へ向けての考察は重要である（実際に教授法の必要性は質疑応答の場でも挙がっていた）。また、これらの教育実践を研究し、効



果と限界について実証的に明らかにした3名の研究発表もまた、これまでの教育実践をさらに洗練されたものとしていくための参考となり、非常に意義深い研究であると言えるだろう。

【文責：本学比較日本学教育研究センター長 森山 新】

日本語教育学部会は12月17日の午前9時から12時半にわたって本学人間文化創成科学研究科棟5階SCS室にて行われた。SCS室はTV会議システムの機材が設置してある教室である。

日本語教育学部会は「文化を取り入れた総合的日本語教育のための新たなとりくみ—TV会議を用いた国際遠隔協働授業とセミナーを通じた交流型授業」というテーマの下、2部構成で行われた。

第1部では午前9時から10時15分にかけて、ヴァッサー大学（米国）の講演、研究発表が行われた。開始時間は日本とアメリカ（ニューヨーク）との時差を考慮した結果であり、ヴァッサー大学では午後7時からの開始となった。比較的早い時間から始まった部会ではあったが、50名程度の参加があり、急遽、座席を増やすほどであった。主な参加者は本学の教員、大学院生、学部生やコンソーシアム参加校の教員、大学院生であったが、学外の大学教員も数名見られた。

ドラージ土屋浩美先生（ヴァッサー大学）には「ヴァッサー大学日本語夏期研究：交流を通じた異文化理解」について御講演いただいた。夏期に本学で行われているヴァッサー大学の日本語研修をご紹介いただきながら、研修中に行われている本学の学部生との交流を通して、ヴァッサー大学の学生の日本に対するイメージがどのように変化し、日本文化をどのように理解したのか、ご報告いただいた。質疑応答の時間には、（1）帰国後の授業のあり方やカリキュラムを知りたい、（2）日本滞在中の文化理解がその後、どのように変わっていくかも報告してほしいという意見があった。

佐野香織さん（ヴァッサー大学非常勤講師、本学大学院生）は「Web掲示板と遠隔TV会議システムを利用した授業実践—『言い訳』に注目して—」について発表された。Web掲示板とTV会議システムを用いて、本学とヴァッサー大学間で実施している授業におけるヴァッサー大学の学生の学びについての研究であった。この授業では、日本人の表現、コミュニケーション方法についてディスカッションを行っており、今回の発表は言い訳という表現、コミュニケーションを扱った授業に着目した報告であった。質疑応答の時間には、（1）Web掲示板やTV会議システムという新しい技術に伴って、新しい教授法や新しい学びの設定が必要ではないか、（2）授業で得た日本人の表現、コミュニケーションに対する知識を授業後、学生が取り入れていくかどうかも見たい、という意見があった。

発表中は画像、音声とも良好であり、若干懸念されていたシステム上のトラブルは皆無であった。双方の様子がスクリーンに映し出され、対話をすると、日本とアメリカという距離感を忘れてしまうような臨場感のある雰囲気であった。

第2部では、午前10時25分から12時半にかけて、本学と同徳女子大学校（韓国）の教員、大学院生による講演、研究発表が行われた。

はじめに森山新先生（本学）から「文化を取り入れた総合的日本語教育のために新たなとりくみ—国際交流型授業と国際遠隔協働授業—」についてお話があった。李徳奉先生（同徳女子大学校）が「総合的日本語教育」を提唱されたように、言語を教える以外の役割が日本語教師には求められている背景、総合的日本語教育に向けた新しい授業の具体例についてご説明いただいた。

李徳奉先生（同徳女子大学校）は「『交流法』による多文化理解の効果と限界について」御講演くださった。文化を理解するためには、「知的理解と共に感性的にも好感を覚え、リスペクトの念を覚える」ことが必要であり、その両面を満たす手段として「交流法」のあり方をご説明くださった。交流法には文化理解だけではなく、日本語学習者を日本語のuser、使い手へと変える側面もあるというお話もあった。質疑応答の時間には、お互いの言語を用いることで文化理解もより深まると考えられるが、どちらか一方の言語を用いることが多いのが現状ではないかという意見に対して、アジアに限ってみると、言語が4、5種類であるため、将来的には相互の言語を使用することが可能ではないかという見解が示された。また、2者間ではなく、3者間以上の方が交流法の効果が得られるという李先生の見解について、国際協力の現場と共通するというコメントが寄せられた。

西岡麻衣子さん（同徳女子大学校大学院生）は「多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性—第5回日韓大学生国際交流セミナーを通して—」というテーマで発表された。本学と同徳女子大学校の交流セミ

ナーをフィールドとして研究を行った結果、セミナーを通して双方に文化学習の効果があったこと、韓国人学生に多文化理解を促す態度が見られたことが報告された。質疑応答の時間には、(1) プログラムの組み方やその過程が重要であり、この2点についての話が聞きたい、(2) セミナー後にも交流が継続しているか、またどのように継続しているのか、という意見、質問があった。

小林智香子さん(本学大学院生)は「国際遠隔協働授業は文化を取り入れた総合的日本語教育として有効か—JFL韓国人日本語学習者の授業評価を中心に—」というテーマで発表された。遠隔協働授業を通して、韓国人学生はTV会議というシステム、日本語学習、文化の理解に肯定的な反応があったことが報告された。質疑応答の時間には、(1) 日本人学生と韓国人学生の双方の学びが目指されているのに「日本人参加者」に対して「韓国人学習者」としているのはなぜか、(2) 日本滞在歴のない韓国人学生の反応をもっと知りたいという意見があった。

李先生の質疑応答では、国際協力をご専門とする先生からのコメントがあり、日本語教育にとどまらない学際的な雰囲気であった。西岡さんと小林さんの質疑応答では、単なる発表に対する質疑応答ではなく、ゼミのようなやりとりがあり、コンソーシアムの目的である「大学院教育」の側面も十分にあったように感じた。また、第2部も引き続き、TV会議システムでヴァッサー大学の土屋先生、佐野さんが参加していただき、海外にいる教員、大学院生からコメントがもらえるという貴重な場となった。

全体を振り返ると、新たな手法を取り入れた授業実践に触れ、その効果だけではなく、その課題も共有できたことは、とても有意義だったと思う。しかし、参加者からはTV会議システムという貴重な機会であるにもかかわらず、会場が狭く、不便だった、残念だったという声があった。それでも、その広いとは言えない会場に、朝9時から多くの方が参加して下さったことは大変有難かった。

【文責：本学大学院生 石井佐智子】

## 〈日本思想部会〉

12月17日(水) 9時30分より、日本思想部会が、文教育学部1号館8階803号室にて開催された。コンソーシアムの部会として日本思想が参加したのは今回がはじめてになる。参加者は、本学学生、教員、海外の招待校の学生、教員、それに他大学の学生、教員(筑波大学、東京大学、岡山大学)など40名ほどであった。司会は、本学大学院生の斎藤真希さんがつとめた。

発表のテーマ等について、以下、発表順にあげる。

### 【第1部】共通テーマ「食・もてなし・家族」

- ①「仏教における「食」(頼住光子・本学)
- ②「神道における「食」(高島元洋先生・本学)
- ③「日本文化論の中の「家族」(張彦麗先生・北京日本学研究中心)

### 【第2部】大学院生自由課題発表

- ④「神と妖怪—柳田國男『妖怪談義』の中で語られるお化け—(大内山祥子さん・本学大学院生)
- ⑤『日本霊異記』についての一考察(尾崎円郁さん・本学大学院生)
- ⑥“On the medical paradigm Stoics and Buddhists A comparative approach”  
(ロレンテュ・アンドレイさん・ブレーズ・パスカル大学大学院生、本学大学院留学生)
- ⑦「幕末期における武士階級の倫理思想—幕末の社会情勢との関連を中心に—  
(李 斌瑛さん・北京日本学研究中心大学院生)

\*使用言語は①～⑤と⑦が日本語、⑥が英語である。

今回は、コンソーシアム全体の共通テーマとして「食・もてなし・家族」が設定され、各分科会でもなるべくこのテーマにそって発表を計画するようという要請があった。それを受けて、教員は第1部でこのテーマにそった発表をすることとし、大学院生については、第2部で自分自身の研究業績について発表することにした。

まず、第1部であるが、①私が仏教について、②高島元洋先生が神道について「食」をどうとらえているのかを発表した。私自身はこれまで仏教思想を専攻し、「食」という視点から仏教を考えたことはなかったが、今回の発表を契機に仏教と食について改めて考え、仏教の「食」観が、徹頭徹尾、空・縁起という仏教の基本理念と深く結び付き、また欲を抑制し修行して悟るという仏教の実践論に支えられていることを確認できたのは大きな収穫であった。

次に②の高島先生のご発表は、神道の「食」を、共同体論として構造的に考えるというたいへんに意欲的なご発表であった。仏教にとって「食」の問題は、修行上最低限摂取すべきものであり、抑制すべき欲望との関連において語られるべきものにすぎず、決して中心的な問題とはなり得ないのに対して、生々と豊穰を宣揚する神道においては、それは世界観の中心に位置する重要な問題となる。このような基本的位置付けを踏まえて、比較思想的観点から質疑が行われた。今後さらに議論を重ね、「食」の観点からも日本思想の解明を試みたい。

③の張先生のご発表では、戦後の日本人自身による日本文化論としての家族論の系譜が示され、その代表的な言説について分析が行われた。論旨が明快で論点がよく整理されたご発表で、多くを教えられた。また、張先生のご発表では、日本人が日本特殊論を唱え自己の優越性を主張するタイプの日本文化論に対する疑義が呈された。日本文化論自身もつ政治的含意というものについて考えさせられるとともに、ご発表を通じて、アジアの国々と日本との間のさまざまな歴史的経緯が、アジアの日本学研究にいまだに大きな影響を与えていることを改めて感じさせられた。また、国家をはじめとする共同体と学問研究との関係についても自覚的である必要を感じた。このような観点は、今回のような機会が与えられなければ、私自身あまりコミットしない観点である。その意味でも今回の部会は貴重な機会であった。

④の大内山さんと⑤の尾崎さんは、ともに修士課程1年生であり、修士論文作成の中間報告として今回発表を行った。二人ともに、高島先生の用語でいえば外部、すなわち、共同体や人間の自我を支える超越的なものを、日本人がどのように表象し、構造化してきたのかという共通の問題関心を根本のところまで共有しつつ、それぞれ柳田國男、『日本霊異記』の研究に取り組んでいるように感じられた。二人ともに、研究対象を卒論とは変えており、今後さらに検討すべき問題も多く残されているが、修論への土台を固めたという意味では今回の発表は大きな意義があった。また、国際的な場で発表し、質疑応答を行ったことは今後の研究活動の国際化のための大きな動機づけとなったことと思う。

⑥のアンドレイさんは、日仏博士課程共同指導のプログラムから奨学金を得て、フランスのブレーズ・パスカル大学大学院から本学大学院に、頼住を受け入れ教官として留学している男子学生である。アンドレイさんと本学とのつながりのきっかけは、本学の大学院イニシアティブプログラムの一環として2006年にブレーズ・パスカル大学にて開催されたシンポジウムであった。今回、アンドレイさんのコンソーシアムでの発表が実現し、学生たちが質疑応答も含めてそこから多くを学べたのは、本学がこれまで推進してきた大学院教育の国際化の成果でもある。

アンドレイさんのご発表は、ギリシャのストア派の哲学と仏教の比較思想を試みたもので、明晰で論理的展開の通りやすい発表であった。特に、「苦の癒し」ということに焦点をあてて、両者の共通点を解明したことは説得的であり、仏教、ストア派の思想の類似性について、これは人間の思惟構造の普遍性を示すのか、それとも古代におけるギリシャ文化とインド文化との交流の成果であるのかと興味をもった。アンドレイさんは英語で発表され、質疑も英語で行った。昨年度ブレーズ・パスカル大学に留学しアンドレイさんとも級友であった伊藤みずほさん（本学大学院生、哲学専攻）にフランス語通訳として同席していただいたが、学生もふくめて質疑が英語で成立したのはうれしい誤算であった。日本学の国際化において英語での発信も、今後重要なファクターとなると思われるが、その意味でも今回のアンドレイさんの英語によるご発表と質疑は大きな意味があった。

⑦の李さんのご発表は、幕末の武士の倫理思想をさまざまな側面から探求したもので、幕末の複雑な歴史的背景をも考慮にいれつつ武士の思想を検討するという難しい課題に意欲的に取り組まれていた。李さんの充実した発表をうかがいながら、李さんご自身の豊かな才能に加えて御指導される先生方のお力を強く感じた。同世代の方のご発表に学生たちも大きな刺激を受けていた。

①から⑦まで司会をつとめた斎藤さんは落ち着いて適切な司会ぶりであった。その斎藤さんの司会者としての報告書の一節に次のような言葉がある。「今回の国際日本学コンソーシアムにおいて、海外の日本学研究に多く触れることができた。私は普段、日本の内側に閉じこもりがちであり、海外への関心というものに乏しい傾向にあった。しかし今回のような経験を持つことは、己の視野を広げるためのよい刺激になったと思う。」斎藤さんの言葉にあるように、今回の部会が、学生たちにとって、自らの研究に国際性を導入し、より広い視野からみずからの研究を構築するきっかけとなればうれしく思う。

最後に、出席者に対するアンケートの感想・要望を紹介しておこう。「外国の先生方や学生さんの研究が聞けて、よかった。」「発表も興味深く、幅広いテーマで自分の研究においても参考となるが多かった。」「また半年後ぐらいに開催してください。」

日本語学、日本語教育学、日本文学、日本文学、日本歴史学に比べて、日本思想学は国際的にもまだまだ研究者も少なく、業績の蓄積も多くはないが、今後、コンソーシアムを通じて、この分野の研究の活性化に貢献するとともに、本学の大学院教育の学際性、国際性の向上に力を尽くしたいと思う。

【文責：本学准教授 頼住光子】

7名が発表し、31名が参加した。

発表者・所属・タイトル、上記の簡単な内容、質疑応答で出た感想や質問など

【お茶の水女子大学 頼住光子先生】

「仏教における「食」」

仏教においては、必要最低限の食欲は認められるが、それ以上のものは煩悩であるとして否定される。このような仏教の食に対する基本認識を踏まえて、食物をえるための托鉢行、原初的には容認されていた肉食が、大乘仏教の発生と中国への伝来を契機に、禁止されるようになったこと、禅において食が非常に重視されることなど、仏教における様々な食のあり方について説明された。

【お茶の水女子大学 高島元洋先生】

「神道における「食」」

神道においてはしばしば、神は食物の神であり、生命の神である。そのような神に食物を供犠として捧げることによって、神の活動を活性化し、自然から豊かな食物を得ようとするという、神道における思考の枠組みが説明された。

講演において、僧侶もこのような供犠の一種であるということが言われたが、修行という側面を持つ僧侶を供

儀として捉えることに疑問が出され、宗教が多様な側面を持つということが指摘された。

【中国・北京日本学研究中心 張彦麗先生】

「日本文化論の中の「家族」

様々な日本文化論において、家族とは、日本的集団主義を育成し、政治システム、社会構造、国家認識に大きな影響を与えるものと見なされてきた。このような点を踏まえ、日本の特性と民主化に関する様々な言説が考察された。

質疑応答では、普遍と特殊という語の使い方について、又、仏教・神道などの近代的カテゴリーを使用することの問題点について論じられた。

【お茶の水女子大学大学院：大内山祥子さん】

「神と妖怪—柳田國男『妖怪談義』の中で語られるお化け—

柳田國男の主な妖怪観は、妖怪を神の零落したものとして捉えるということだ。この柳田が重視した妖怪観を取り上げ、そこに至るまでの妖怪観の変遷、フレイザーの「金枝篇」の影響、また、このような妖怪観が後の柳田の祖霊研究へ繋がっていくということが説明された。

質疑応答では、王の衰え＝植物神の衰えという金枝篇の枠組みを、信仰の衰え＝神の衰えという柳田の妖怪観に対比させることについて疑問が出された。

【お茶の水女子大学大学院 尾崎円郁さん】

「『日本靈異記』についての一考察」

「日本靈異記」における私度僧に着目し、僧と仏教の関係が考察された。私度僧は実際の仏道の伝道者であったために、彼らを迫害することは仏道の迫害であるとみなされていた。故に、私度僧を迫害したために、悪い報いを受けるという話が「日本靈異記」にしばしば登場するのである。

質疑応答では、「日本靈異記」における女性観について論じられた。

【仏国・パサカル大学大学院生、日本お茶の水女子大学大学院留学生 ロレンテュ・アンドレイさん】

“On the medical paradigm Stoics and Buddhists A comparative approach”

仏教とストア派は共に、人間の苦しみからの解放を目指している。両者は、医者が病気の原因と治療の手段を探すように、苦しみの原因を見つけ、そこからの解放の方法を明らかにする。その方法とは、自己を追求し、真理を体得することである。このように仏教とストア派を比較検討し、共通点の指摘がなされた。

質疑応答においては、The nature lawという言葉について、仏教やストア派の現代への影響、また、ストア派と仏教の自然観の相違などについて論じられた。

【中国・北京日本学研究中心・大学院生 李 斌瑛さん】

「幕末期における武士階級の倫理思想—幕末の社会情勢との関連を中心に—

まず、幕末期の動乱によって武士の戦闘者としての側面が強調されたこと、次に、江戸時代を通じて形成された儒教的な士道が依然として影響力を持っていたこと、最後に、外国の脅威に対して国家という意識が共有されたことの三点から、幕末の武士の倫理観が説明された。

質疑応答においては、幕末において天皇への忠誠という問題が非常に重要であるということ、また武士階級を狭く限定されたものとして考えるべきではないということが指摘された。

感想

今回の国際日本学コンソーシアムにおいて、海外の日本学研究に多く触れることができた。私は普段、日本の内側に閉じこもりがちであり、海外への関心というものに乏しい傾向にあった。しかし今回のような経験を持つことは、己の視野を広げるためのよい刺激になったと思う。特にローレンティ・アンドレイ氏の発表は、西洋の思想に対する関心を喚起させられるものであり、非常に興味深く聞くことができた。

【文責：本学大学院生 齋藤真希】